

「女性同性愛」言説をめぐる歴史的研究の展開と課題

著者	杉浦 郁子
雑誌名	和光大学現代人間学部紀要
巻	8
ページ	7-26
発行年	2015-03-13
URL	http://id.nii.ac.jp/1073/00003792/

「女性同性愛」言説をめぐる 歴史的研究の展開と課題

杉浦郁子 *SUGIURA Ikuko*

- 1 — 問題関心
- 2 — 「女性同性愛」の問題化—1910年代から30年代半ば
- 3 — 「女性同性愛」の性欲化—戦後から1960年代
- 4 — レズビアン解放運動の展開—1970年代から1990年代半ば
- 5 — 結語

【要旨】近代以降の日本社会は「女同士の親密な関係」「女を愛する女」に対してどのような意味を与えてきたのだろうか。「女性同性愛」言説の変容をたどる研究成果を「性欲」の視点から整理することが本論文の目的である。ここで「性欲」の視点とは、大正期に定着してから現在まで様々な仕方で構築されてきた「性欲」という領域が、女性同性愛に関する言説をどのように枠づけてきたのか、反対に、女性同性愛に関する言説が「性欲」をどのように枠づけてきたのか、という視点のことをいう。したがって、本論文が注目するのは、「性欲」が女同士の親密性をめぐる経験や理解の仕方に関わっていることを示し得ているような研究成果である。この「性欲」の視点を軸にして、「女性同性愛」言説をめぐる歴史研究の現在における到達点と今後の課題を明らかにしたい。

1 — 問題関心

1-1 目的および学術的背景

近代以降の日本において「女同士の親密な関係」はどのように語られてきたのか。「同性愛」という呼び名がいつ頃与えられ、それに関するどのような言説が紡がれてきたのか。本稿は、その展開をたどる歴史的な研究を「性欲」の視点から整理することを試みるレビュー論文である¹⁾。

「同性愛」に対する人々の認識がどのように変化してきたのかを問う研究は、日本では、男性間のそれに関するものが先行した。まず、その状況を概観するところから始めたい。

ミシェル・フーコーの「セクシュアリティの歴史」シリーズ²⁾に触発され、その日本版を素描する研究が1990年代半ば頃に相次いで発表された。たとえば、小田亮(1996)や川村邦光(1996)、古川誠(1993a, 1993b, 1994, 1995)らは、「性欲」と訳された「セクシュアリティ」という領域の日本的な構築や受容のありように注目し、近代日本形成期に「性欲」

という概念を中心に人々の行為や経験を理解する実践が広がっていった過程を明らかにしている。

なかでも古川による研究は、男同士の肉体的な交流が「同性性欲」という概念を介して病理化され、大正期に「同性愛者」という性的主体が誕生したことを論じており³⁾、同性愛の言説史研究の先鞭をつけた。2000年代後半以降には、男性同性愛をめぐる言説に焦点をあてた力作が上梓され（石田 2006, 2014; 前田 2011, 2014; 森山 2012; 新ヶ江 2013）、現在、明治期から 2000 年代までのおよその流れが明らかになっている⁴⁾。

「女同士の親密性」や「女を愛する女」に対して近代以降の日本がどのような意味を与えてきたのかをたどる歴史的な研究は、男性のそれに少し後れを取ってきた。しかし、2014年に、それまで空白であった戦後の混乱期から 1960 年代に関する研究（赤枝 2014; 李田 2014）が発表されたことにより、1910 年代から 1990 年代半ばまでの言説の変容を大まかに通観できるようになった。とはいえ、関連する研究のうち、主要な 2 つは修士論文である（黄綿 2008; 李田 2014）。本論の執筆動機のひとつに、アクセスしづらいこれらの論文の内容を紹介したかったことがあるが、より重要なねらいは、「女性同性愛」言説をめぐる歴史的現在の現在における到達点と今後の課題を明らかにすることにある。

さらに、本論は、女性同性愛をめぐる言説の変容を「性欲」の視点を軸に整理していく。ここで「性欲」の視点とは、大正期に定着してから現在まで様々な仕方で構築されてきた「性欲」という領域が女性同性愛に関する言説をどのように枠づけてきたのか、反対に、女性同性愛に関する言説が「性欲」という領域をどのように枠づけてきたのか、という視点のことをいう。以下では、このような視点から既存の成果をまとめることの現代的意義を説明することで、本論の意義を示したい。

1-2 「性欲」概念を軸に「女性同性愛」言説をたどることの現代的意義について

議論を先取りすることになるが、女性同性愛をめぐる言説は、「性欲」という領域がジェンダー非対称に構築されていることに従属してきた。「性欲」のジェンダー非対称性は、むしろ、過去の話ではない。現代日本でも、性欲のかたちは男女で異なっていると考えられている。男の性欲は「強く」「能動的だ」とされているのに対し、女のそれは「希薄だ」「受動的だ」とされている。このため、女から女へ向かう性欲は、男から男へ向かうものと比べて際立って見えにくい、という現実がある。

現代日本のレズビアン差別の特徴は、その性欲が自分にも他者にも確認しにくいことにあり、レズビアン差別を明らかにしようとするのならその「少数性」ではなく「不可視性」を問題にすべきだというのは、差別を告発する論者たちの一致するところである。筆者も、女性の同性愛的欲望の可視化が差別打開の一手になると考えている⁵⁾。

本論で検討するのは、近代以降の日本社会が女から女へ向かう性欲をどのように消去したり捏造したりしたのか、その「方法」を明らかにするような研究である。あるいは、「性欲」という領域が女同士の親密性をめぐる経験や理解の「仕方」に関わっていることを示

すような研究である。そのような「方法」の日本固有のありようや変容を歴史的に検証することは、ジェンダー非対称の「性欲」を再構築する「方法」について思索するための足場になると思うのだ。

「性欲」と「女性同性愛」との言説における相互作用を探る視点は、戦前から1960年代までを対象とした研究にはかならずある。ところが、1970年代以降の日本で続けられてきたレズビアン解放運動のテキスト——それまでの「同性愛」イメージを変えることを試みたテキスト——は、「性欲」の視点から分析されていない。この、言説史上の見落としを指摘することも、本論のねらいのひとつである。それらのテキストは、どのような感情・外見・関係・行為・思想等々が「レズビアン」という「性的主体」に属すると述べているのだろうか。どのようなものを「性欲」をめぐる経験として認識しているのだろうか。このような視点から解放運動のテキストを再読することは、レズビアンの不可視性という現代的問題の考察を深めると思われる。同時にそれは、「性欲（セクシュアリティ）の歴史」研究の射程を伸ばす作業となるだろう。

1-3 本論文の構成

本論文では、時々の言説の特徴を大まかに3つの時期に分けて検討する。第一期は1910年代から1930年代半ばまでである。「同性愛」という概念が普及し、女学生間の親密な関係を指す語としてよく知られるようになったのがこの時期である。なお、1930年代後半以降の戦時期についてはよくわかっていない。性的な描写が禁じられるようになったため、分析に足る資料が見つからないと思われる。

第二期は、戦後から1960年代までであり、「女性同性愛者」という主体が少しずつ形成されていった時期である。この時期の言説の特徴として、「レズビアン」という概念の普及とともに女同士の関係における肉体的な接触が自明視されるようになったこと、つまり女性同性愛が「性欲化」されたことが挙げられる。

第三期は、1970年代から1990年代前半である。1970年代に入ると「女性同性愛者」「レズビアン」などのアイデンティティをもつ女性たちが自らを発信するようになる。1970年代にはミニコミ誌で解放言説が繰り出され、1980年代に入るとそれらが一般雑誌で流通するようになるが、すでに述べたとおり、この時期のテキストを「性欲」の視点から検討する研究は見当たらない。

続く2章、3章、4章で、各時期に関する既存研究を整理していく。1910年代から1990年代半ばまでの言説の変容をある程度つかむことができるようになったとはいえ、資料・分析上の課題も残されている。それらの課題についても、本稿の関心に即しながらその都度、確認していきたい。

2 — 「女性同性愛」の問題化—1910年代から30年代半ば

2-1 通俗性欲学ブームと「同性愛」概念

戦前に関する研究（赤枝 2004, 2005, 2011; 肥留間 2003; 菅 2006; 黄綿 2008）が観察の起点とした 1910 年代から 1920 年代は、日本で「通俗性欲学ブーム」が起こった時期である。1910 年代に西洋の性科学書の翻訳が始まり、1920 年代には日本人による「性」に関する書籍や雑誌の発刊が相次いだ。それらは「性欲」⁶⁾に大きな関心を寄せ、膨大な議論を時代のマスメディアに乗せることで「性欲」という「科学」の言葉を通俗化させたことから、「通俗(的)性欲学」と呼ばれている（古川 1993b）。

通俗性欲学が広めたのは、何よりもまず「性的身体（身体は性的である）」というコンセプト——人間の身体は性欲で満たされており、それに導かれて恋愛や結婚、性交渉や生殖をめぐる諸活動をするという考え方（澁谷 2013: 21）——である。また、通俗性欲学は、性欲を「正常」と「異常」に区分し後者を「科学的」に解明することに力を注いだ（小田 1996: 55-56）が、「同性愛」という概念は、異常な性欲の一種として、通俗性欲学ブームのなかで定着したことがわかっている（古川 1995）。異常とされた性欲は「変態性欲」と総称された。

「同性愛」という語が登場する以前、男同士の関係を指す言葉はいくつもあった。なかでも「男色」は明治期までポピュラーな言葉であり続けた。それは「性的な関係をふくむ、男性同士の精神的・肉体的な深い交流」（前田 2011: 25）を意味しており、1890 年代まで硬派の男子学生に理想視され、流行していたという。「男色」と対置される言葉に「女色」があったが、それは女同士の関係を指すものではなく、男性が女性（とりわけ芸娼妓や遊郭の女性）と取り交わす性行為を指す言葉である。「男色／女色」は、成人男性を中心に据えたいうえでその性的対象が男（少年）か女（遊女）かを区別する概念であり（古川 1993a）、男性の行為にのみあてがわれる言葉であった。

それに対して、大正期に定着した「同性愛」は、男にも女にも使える概念である。1900 年代に入ると、男同士の肉体的な接触が homosexuality として問題にされるようになった。その訳語として「同性交接」「同性的色情」「同性（間）性欲」など多くの表現が作られたが、1920 年代には「同性愛」に収斂していったという。「男色から同性愛へ。しかも同性（間）性欲ではなく同性愛へ」（古川 1995: 206）。性欲を人間の身体を支配する本質と見なし、それに特権的な地位を与えた通俗性欲学（川村 1996: 82）が、「性欲」ではなく「愛」という言葉を採用した。この認識の転換に影響を及ぼしたのは、女学生同士の親密な関係の社会問題化である、というのが、同性愛の社会史を研究した古川誠の考察である。古川の議論をまとめると次のようになる。

1899（明治 32）年に女子中等教育の制度が作られたことで 1900 年代に女学生が急増し、女学生への世間の関心が高まった。その過程で、女学生間の親密な関係が取り沙汰される

ようになったが、「女は男より友愛の情に厚い」「女同士で仲の良いのは当たり前」とするジェンダー規範が作用し、女学生間の関係は肉体的なものではなく、精神的なものだと考えられた。homosexualityの訳語として、肉体的なニュアンスの強い「交接」「色」「性欲」ではなく、精神的な側面に重きを置いた「愛」が採用された理由の一端は、女学生間の親密な関係を視野に収めるためだったのではないか(古川1994: 43-45, 1995)。

2-2 女同士の親密な関係と「同性愛」

(1) 女学生の「同性愛」

「同性愛」概念が定着してから1930年代までは、「同性愛といえば女性とりわけ女学生のもの」(古川1995: 207)と見なされる状況があったことが古川によって指摘されている。こうした状況について丁寧に調べたのが肥留間由紀子と赤枝香奈子である。

①女学生間の「同性愛」の「発見」

肥留間(2003)は、1911年7月26日に新潟県親不知の海岸で女学校卒業生ふたりが起こした心中事件をきっかけに、同性愛が女学生間に「発見」され、その後一気に問題化されていったプロセスを新聞記事の分析から明らかにしている。この先駆的な研究では、同性愛言説の分析より、問題化をうながした社会的背景の分析のほうに力点が置かれている。

肥留間が取り組んだのは、1910年代初頭という限定された——しかし女性同性愛の言説史において決定的に重要な——時期である。それは、女学生が社会のなかで特異な集団として認識されるようになり、女学生に好奇の目が注がれていた時期である。また、『青鞥』やその社員の奔放な言動が、自立した「新しい女」の誕生を社会に強く印象づけていた時期でもあった。折しも、女性参政権運動に参加するイギリスの「闘争的な女性」がさかんに報じられており、そのような「過激」で「進歩的」な女性になり得る女学生の教育に対して、強い関心と危機感が蔓延していたという(肥留間2003: 21-25)。そして、この「問題」は、「良妻賢母」規範——異性愛を前提とする性分業と母役割の強調——を揺るがすような、国民国家の重大課題に連なるものとして認識された、というのが肥留間の時代分析である(肥留間2003: 25-28)。

このような時期に起こった親不知の心中事件は、「同性の愛」の末の心中と報じられ、女学生間に「恋愛」が存在することを可視化させた。事件が大きく取り上げられた理由について、肥留間は次のように述べている。当時は恋愛そのものが「道徳的墮落」ととらえられており、同性の恋愛はいずれ異性の恋愛へと発展する恐れがあるので放置してはいけないと考えられていた。しかし、何よりも女子教育への関心が高まっていたなかで女学生間の親密性が「発見」されたことが、「同性の愛」の社会問題化に拍車をかけた(肥留間2003: 20-21)。つまり、「同性の愛」は、それが「同性同士だから」でなく「女学生同士だから」人々の関心を集めたのである。

②性科学の知の浸透

肥留間は、1890年代から性科学の著作の翻訳が始まっていたものの、1910年代初頭の新聞記事には性科学の「知」に依拠した言説は見当たらないと述べており（肥留間2003:20）、したがって、女学生同士の同性愛が「性欲」との関連においてどのように論じられたのか、その過程で性科学がどのように参照されたのかについて、踏み込んだ分析をしていない。この点を詳らかにしたのは、赤枝香奈子の一連の研究である（赤枝2004,2005,2011）。

赤枝は、1911年7月の女学校卒業生同士の心中事件を取り上げた『婦女新聞』の社説（1911年8月）が、「同性の愛には2種別ある」という認識を示していたことを明らかにしている（赤枝2011:110-111）。西洋の性科学は、homosexualityを「後天性（仮性）」と「先天性（真性）」とに分類する認識を有しており、『婦女新聞』はこの枠組みを用いて心中事件を解釈した。これ以降、性科学の知が女同士の親密な関係を理解するさいの参照元となったのである。

一部の知識人のものであった性科学の知を「同性愛」という概念とともに一般に浸透させたのは、女学生間の親密な関係を擁護しようとする言論であった。赤枝は、1910年代の代表的な女性作家の1人であった田村俊子が、新潟の心中事件の後に危険視されるようになった女学生間の極端な親密さを、「肉欲」から切り離そうとしたことを示している（赤枝2011:121-124）。また、赤枝は、「エス小説」⁷⁾を愛読したり同性へ「熱中」したりする女学生たちの実践や、これを容認し女学校への批判をかわそうとした学校教育関係者の議論を紹介している。女同士の親密性をめぐって生み出された豊富なテキスト⁸⁾は、それまであいまいだった「友愛」と「肉欲」の境界とともに、「女性同性愛」の輪郭を明確にしていた。そうして、次のような認識枠組みが流通するにいたる。すなわち、「女性同性愛」は、一時的・精神的・後天的でいずれ異性愛に向かっていく「仮性」と、男性化した女性による永続的・肉欲的・先天的で矯正できない「真性」とで構成される、という枠組みである。

③女学校における「仮の同性愛」

「仮性」にわりふられた女学生間の「同性愛」は、1920年代後半になると、肯定的に評価されるようになったという。

女学生間の親密性は、性科学では「病理」とされたが、当の女学生たちから広く支持された。女学生たちは、自分たちの関係を「『対等性』や『自主性』、すなわち『自由』や『平等』という近代的理念に基づく」（赤枝2011:187）ような、人格的な交流を可能にするものと見なした。また、彼女たちは、性科学の描く「病理」が自分たちの実践と「あまりにかけ離れていた」（赤枝2011:194）ためか、性科学的に正常か異常かということほとんど気にしなかったようである。それよりも「『真の愛』を実践しているか否か」（赤枝2011:167）という観点から、自分や友人の関係をさかんに吟味したという。彼女らが「真の愛」として志向したのは、「お金」や「同情」という「世俗」、「野蛮」や「下層」を連想させる「肉欲」ではなく、「美」「繊細さ」「精神性」などと結びつけられたプラトニックな「純愛」で

あった。

こうした関係が好まれたのは、それが結婚と対極にあったからだと赤枝は考察する。当時の中産階級の結婚は義務的なものであり、夫婦の関係は自由、対等でなかった。近代的自我に目覚めた「個」としての女性が理想とする関係を実現できたのは、血縁・地縁から切り離され、将来の結婚圧力から一時的に逃れられる女学校だけであった。女学生たちは、お互いの親密な関係を「単なる友情」と見なしたり「病理」と見なしたりする外の世界の基準を退け、それをロマンティック・ラブとして遂行することを通じて、女学校独自の人間関係をめぐる規範を作っていたのである。それはつまり、女学校の文化であった。

他方、教育者や学校側は、女学校で親密な関係を経験することで「女らしさ」が育まれるという論陣を張って、校内の過度な親密性を擁護した。ここで「女らしさ」とは、「近代家族という私的領域の担い手となるにふさわしいとされる資質、すなわち、他者への思いやりや協調性、家庭運営の責任を負えるだけの自主性」(赤枝 2011: 190)である。女学生間の親密な関係は、「他者との関係への自己投入、という女性に課せられたジェンダー規範から見て」(赤枝 2011: 201)それほど悪くないものだとされ、女性が「愛情の持ち主」(赤枝 2011: 205)として成長するためのステップとして受容されたのである。

女学校の「同性愛」に関する言説から漏れ出るのは、当時の中・上層に望まれた女性像や女学生に対する教育的関心である。それは、女学生たちが、いまは「未完成」であってもいずれ家庭の責任者としての役割を立派に果たせる女性となるべく「矯正」されなければならない、という関心であった(赤枝 2011: 120)。

このように女学生間の親密な関係は、肉体的な接触や反応と切断され、当時の結婚・家族制度と抵触しないどころか、それを補完するものとされた(赤枝 2011: 103)。「仮の同性愛」は、中・上層の未婚女性による「性欲」不在の「女らしい」実践として構築されたのである。

(2) 下層女性の「同性愛」

肥留間や赤枝が扱ったのは、数の上では少数派であった女学生に関する言説であった。では、同じ時期、女学生以外の女たちの親密性はどのように語られ、問題化されたのか。この問いに取り組んだのが黄綿史^{きわたふみ}の修士論文である。黄綿(2008)には、より正確で具体的な論証が求められるが、今後さらなる調査が期待されるような重要な観察がいくつもなされている。以下でそれらを紹介したい。

黄綿が主に取り上げるのは、1910年代から30年代の新聞・雑誌記事に多く登場するという都市部の労働者階級の女性たちである。黄綿は、「仮の同性愛／真の同性愛」という認識枠組みが適用されるのは女学生を含む中・上層の女性だけであること、女工・女給・看護婦などの下層あるいは地方出身の女性たちは——女学生同様「女ばかりの環境」で生活しているにもかかわらず——「仮」か「真」かを詮索する視線が向けられないことを述べている。下層の女性たちの親密な関係には肉体的な接触が当然あると考えられ、「仮の同性

愛」の可能性が想定されなかったからである。

黄綿は、既存研究を参照しながら、下層の女性が「性的に墮落している」というイメージを背負わされていたことを整理している。たとえば、女中⁹⁾や女工¹⁰⁾は「性的に乱れた環境で育っている」という理由で、風紀を乱す危険な存在とされていた(黄綿 2008: 15)。大正期から流行した女給は、チップを増やそうと性的なサービスが過剰になったこともあり、次第に「醜業婦」と見られるようになった(黄綿 2008: 20)。

労働者の女性を「性的な問題をはらむ存在」とする見方の背後には、貧しさや出稼ぎに対する蔑視のみならず、裕福な層で誕生した専業主婦が「あるべき女性像」として規範化されたことがある、と黄綿は指摘する。働く下層の女性は「女性性」を喪失した存在として、もっと言えば「女らしくない性欲の持ち主」「男らしい能動的な性欲の持ち主」として認識されやすかったという(黄綿 2008: 22)。そのため、都市で働く女同士の親密な関係は、肉体的な接触の有無を改めて問う必要のない「真の同性愛」と考えられたのである。

「同性愛」を規律化する方法も、階層による違いが顕著だった。中・上層の子女については、その予防策や治療策が熱心に語られたが、女子労働者の場合、それを「治す」という発想は見られず、彼女らの性行為の異常さを性科学や優生学の知を引いて¹¹⁾強調する記事がほとんどだという(黄綿 2008: 23)¹²⁾。このように、社会の側に下層女性の性欲を管理する発想がなかったのは、「日清・日露戦争を経て健康な兵士・その兵士を産むことの出来る健康な女性といった『国民の質』が問われる時代となり、生殖を奨励される階層とされない階層に分離がおき」(黄綿 2008: 23) だからだ、というのが黄綿の議論である。社会は、人口の再生産を担うことを期待された若年の中・上層女性の性欲のコントロールに関心を集中させた。

国家による人口調整と関連するこのあたりの議論を含め、丁寧な記述を要する箇所が残されているものの、黄綿の研究は、下層や労働者階級における女同士の親密性がどのように問題化されたのかについて、大筋をとらえている¹³⁾。「真の同性愛」言説のさらなる調査は、「性欲」という領域が——性別、階層、職業、エスニシティなどと結びつけられながら——近代日本においてどのように形づくられていったのかを探るセクシュアリティ研究にとって、重要な課題である。

(3) 中間考察

戦前の女性同性愛言説を貫く「仮／真」の認識枠組みは、ヘテロセクシズムを体現するものである。ここでヘテロセクシズムとは、異性愛を絶対視したうえで、男の能動性と女の受動性の組み合わせで成り立つ性関係を望ましいものとする規範である(江原 2001: 138-158; 竹村 1997)。生産性を期待された女学生は、この規範の影響のもとで、もっぱら結婚後に夫によって性欲を開花される客体と見なされ、学校内での親密な関係は性欲と無関係なものと考えられた。「男性的」とされた働く下層の女性に主体的な性欲が発見されたのも、ヘテロセクシズムの発現の一端と理解できる。

性科学や通俗性欲学は、人間の身体に性欲という内面的属性を埋め込んだが、「性欲のあり方は男女で異なる」とするヘテロセクシズムを合わせもっていた。「女の愛情は、肉体よりも寧ろ精神に傾きて、精神に満足を得るときは、肉体の快楽はこれを犠牲に供する」(羽太・澤田 1915: 231)、「女性間の性欲は浅くして広く、男性間の性欲は、深くして狭し」(羽太・澤田 1915: 230) といった知を根拠に、女学生間の親密な関係は一時的で無害と考えられたのである。それは「女学校などの周りの影響で誰もが経験する(可能性がある)もの」「処女の時代に限られるもの」(小田 1996: 85-86) とされた。対して、肉体的な接触を想定された男性間の関係は、持続的で有害であり、「少数の特別な者の間のみみられる」(小田 1996: 85) 異端とされたのであった。

3——「女性同性愛」の性欲化—戦後から1960年代

次に、女性同性愛をめぐる「真／仮」の認識枠組みがいかに変容したのかを準拠点にしつつ、戦後から1960年代までを対象とした研究成果を整理する。

3-1 戦後の復興期

戦前における性欲本や性欲雑誌の出版ブームは、1930年代以降に進んだ戦時体制でいったんは途絶えた。しかし、戦後の復興期に入ると、「エロ」「グロ」を売りにしたカストリ雑誌¹⁴⁾が大量に刊行されるようになり、1950年代初頭には、ありとあらゆる「変態性欲——同性愛・異性愛を問わず「普通ではない」とされた性——をテーマとする雑誌が立て続けに創刊された(下川 1995)。この『『変態的』とされた性風俗を専門に扱う、カストリ雑誌以後の時期に販売された雑誌』(石田 2006: 91)のことを、ここでは「性風俗雑誌」と呼ぶことにする。

さて、赤枝(2014)は、1940年代後半の資料を取り上げ、戦前の言説との違いを観察している。赤枝によれば、戦前の同性愛観——「同性愛には2種類ある」「女学生時代の同性愛(=エス)は常態であり、やがて異性恋愛にいたる」「肉体関係や男性化を示すものは変態である」——を踏襲した記事が多いものの、戦前には見られなかった描写もあるという。それは、「エス」がポルノグラフィックに描かれるという事態である。性描写を売りにしたカストリ雑誌において「親密な関係のポルノ化」という現象が起こり、「エス」や大人の女同士の関係にも肉欲的な要素が見出されたのである(赤枝 2014: 134-136)。

3-2 1950年代の性風俗雑誌の言説

このように、戦後の雑誌メディアは、女性同性愛をソーシャルな関係からセクシュアルな関係へと読みかえていった。以下でそのプロセスをたどるが、1950年代の状況は性風俗雑誌を資料とした研究からうかがい知ることができる。

(1) 性風俗雑誌というメディア

1950年代から60年代にかけて発行されていた性風俗雑誌は、よく知られているものだけでも、『奇譚クラブ』(1947-1983)、『人間探究』(1950-1953)、『あまとりあ』(1951-1958)、『風俗科学』(1953-1955)、『風俗草紙』(1953-1955)、『裏窓』(1956-1965)、『風俗奇譚』(1960-1974)などがある。これらを観察対象とした研究には、「レスボス愛」に関する記事を検討した Mark McLelland (2004)、「女性同性愛」の言説分析を行った李田光の修士論文(2014)、「レズビアン」概念の定着プロセスを追った赤枝(2014)がある。

性風俗雑誌の特徴は、自らを「性」を探究するアカデミックなものとして位置づけ「科学的」に論説する体裁をとりつつ、読者に「娯楽」として、つまりポルノグラフィとして受容される表現を提供していた点にある(石田2006: 93-95; 李田2014: 9-14)。さらに、雑誌に見られる男性同性愛の表象をたどった石田仁は、性風俗雑誌のふたつめの特徴として、「専門的研究者・アマチュア研究者・記事執筆者・一般読者らの間の相互交流が極めて活発」であったことを挙げ、その交流を座談会と読者投稿欄が支えていたと分析する(石田2006: 95-99)。そうした交流を通して、性科学の知が再編成され一般に流通した(=通俗化した)が、やはり石田の観察によれば、性風俗雑誌における性科学言説の影響力は1950年代後半には薄れ始め、1960年代に入ると見られなくなるという(石田2006: 105)。したがって、1950年代の性風俗雑誌というメディアは、性科学の知がどのように引用され、通俗化の過程でどのように変化したのかを探ることのできる重要な資料なのである。

(2) 性科学的言説への従属

李田の修士論文(2014)は、「仮の同性愛／真の同性愛」の認識枠組みが1950年代にどのように変容したのかという問いを保持し、そうした性科学的な知のふるまいを記述することに力点を置いているため、「科学的」なスタイルを強調した『人間探究』『あまとりあ』の2誌を対象にしている。両誌において、女性同性愛に関する「仮／真」の枠組みは維持されており、この点は戦前の言説との連続が見られるが、「仮の同性愛」——李田のいう「過渡的な同性愛」——よりも「真の同性愛」のほうが注目を浴びていることを李田は示している。

また、李田は、具体的な事例を下敷きにした記事を分析し、女同士の関係を「真の同性愛」だと判定する「やり方」を次のようにまとめている。すなわち、①永続的なものであり、②パートナーのうち一方が「男性化」しており、③男性に対する嫌悪感をもち、④結婚も拒否している、という4つの特徴のうちどれか1つに当てはまれば「仮の(過渡的な)同性愛」から外され、「真」の側に位置づけられる(李田2014: 36)。これは一見、戦前の「真の同性愛」コードと同じかのようなのだが、50年代の記事は、男性化した女性の身体的な特徴ではなく、その服装や行動、態度に注目している点に戦前との違いが見られるという。戦後の性科学は、「真の同性愛」のなかでも、先天性(身体性)という「絶対的異常」から後天的な影響へ興味を移行させたと李田は分析する(李田2014: 75)¹⁵⁾。

このような関心の移行は、「治療」の可能性と分ちがたく結びついていたようだ。両誌の中心的な書き手であり、精神分析を用いて多くの相談に乗ったとされる性科学者に、高橋鐵という人物がいる。彼は、戦前に影響力のあったクラフト＝エビングの見方を退け「先天的な同性愛は少なく、ほとんどが後天的である」と主張することで、同性愛を自分の心理療法の対象として囲い込んだという。そして、相談者に、過去を遡って同性愛の原因を分析することを求めた(杵田2014: 71)。

このように、同性愛の「治療」のために高橋に「相談する」という回路が開かれていたことが、「真の同性愛」という性科学的言説を自身に引きつけて語る読者を生み出した。杵田は、『あまとりあ』に掲載された「女子同性愛者(サッフイスト)の告白——正常な愛に背を向けた性の受難者への警告」(1953年5月)という記事を、「真の同性愛」コードに依拠した自分語りを分析できる初期の重要文献として紹介している。この記事には、高橋に相談をしたJ子さんの手紙が原文のまま掲載されており、そこには、高橋の著作を読み「過渡的な同性愛」だと思っていた自らの行為を「真の同性愛」と結びつけて考えざるを得なくなったことや、自分の行く末に対する恐怖心などが綴られているという。杵田はここに、性科学の知を内面化し、それに沿うように自分の経験や心理状態、家庭歴や身体的特徴などを語る／語らされるという「従属化＝主体化」という事態を見ている(杵田2014: 80-81)。

(3) 性科学的言説への抵抗の痕跡

ところで、男性同性愛の系譜をたどった石田は、1950年代の性風俗雑誌において、「医学的研究に解釈枠組みや分類・語彙を借り、客観性・研究性を装いながらも、そうした解釈枠組みをブリコラージュ的に駆使することで、結果として(医学的)権威が無効化」(石田2006: 135、括弧内は筆者が補足)されていく様子を記している。また、次第に、医学と「変態性欲」読者とのやりとりが少なくなったり、相談者を「善導」しようとする専門家が敬遠されたりし、誌面は「変態性欲」当事者の自律的圏域として運用されるようになっていったという(石田2006: 135)。

杵田もまた、『人間探究』に掲載された「[天国か地獄か]男性同性愛者の集い」(1951年1月号)という座談会で、高橋鐵の精神医学的「治療」の有効性に懐疑を突きつけ、「僕たち」という集合的なカテゴリーを立ち上げた当事者の発言に注目している。さらに、高橋が「治療」の一貫として提案した「同性愛者同士で話し合う場を設ける」という構想が戦後初の男性同性愛サークル「アドニス会」の発足につながったことや、それが高橋の手を離れ男性同性愛者のネットワーク化やコミュニティ化をもたらしたことを論じている(杵田2014: 72-74)。

では、女性同性愛というカテゴリーで自らを語る女性たちによって、性科学の知への抵抗はなされなかったのだろうか。杵田は、前述のJ子さんのナラティブから「治療」に取り込まれまいとする抵抗の跡をすくいあげているが、結局はそれが挫かれていく様子に分

析している（杵田 2014: 83-85）

McLelland (2004) は、『人間探究』『あまとりあ』と比べて娯乐的（ポルノ的）だった『風俗草紙』『風俗科学』を取り上げ、「レスボス愛」に関する記事について論じている。『風俗科学』には「女性のホモ罷り通る」（1955年3月号）と題した座談会が掲載されており、McLelland は、この座談会に3人の女性が参加して自らの経験を語ったという事実を書き留めている（McLelland 2004: 15-17）。また、同誌には「女性ホモの会」（1955年2月号）の設立を要望する記事もある。両誌が終刊した1955年以降、「レスボス愛」は男性の性的ファンタジーに成り下がったと McLelland は述べているが、彼が観察した資料から、女性読者たちが性科学的な知や異性愛男性的な欲望へ抵抗する様子が拾えるかもしれない。杵田 (2014: 88) も述べているとおり、『人間探究』『あまとりあ』以外の性風俗雑誌のテキストを杵田と同じような視点で再読する必要があるようだ。

（4）キンゼイ報告の影響—50年代後半

杵田は、高橋鐵が主宰した『あまとりあ』における「高橋鐵の知」の影響（1950年代前半）を分析しているが、赤枝 (2014) は、同じ『あまとりあ』に1955年に掲載された記事を紹介し、『キンゼイ報告』が1950年代後半に女性同性愛言説に与えた影響を分析している。

いわゆる『キンゼイ報告』は、アメリカ白人男女の性行動に関する調査報告であり、その邦訳は男性篇が1950年に、女性篇が1954年に出版された。1950年代後半以降、クラブ＝エビングやエリスなどヨーロッパの性科学ではなく、キンゼイが「科学的権威」として影響力をもつようになった。

女性同性愛の言説史という観点から『キンゼイ報告』の特筆すべき点を挙げれば、「同性愛の関係は女より男に多い」との認識を示したこと、女同士の関係に肉体的な接触があることを自明としたことで、戦前の「仮性／真性」の認識枠組みを覆したことである（赤枝 2014: 137-140）。

さらに『キンゼイ報告』は、女性間の性的な関係を指す言葉として「レスビアン」を使ったことでも注目に値する。しかしながら、1950年代を通じてこの外来語はそれほど一般化せず、さらに「フランスで流行しているような優雅に知的に楽しめる身体的接触」というイメージとともに使われたため、否定的な含みが前面に出ることはなかったという（赤枝 2014: 140-141）¹⁶⁾。

3-3 1960年代の一般雑誌における「レスビアン」

（1）「レスビアン」概念の定着

ところが、1960年代に入ると、大衆向けの雑誌（一般雑誌）が「レスビアン」と日本の具体的な事象とを結びつけるようになる。たとえば、精神的な「エス」が肉体関係のある「レス（ビアン）」へ発展する可能性を指摘する、松竹や宝塚の歌劇団の男役やそれに憧れる

少女を「エス」や「レス」と関連づける、当時増えていた男装の女性が接客をする店を「レスビアン・バー」と呼び、バーに集まる女性も「レスビアン」と呼ぶ、といった具合である(赤枝2014:142-146)。

さらに、1960年代後半には、「レスビアン」が「フリーセックス free sex」ブームのなかに組み込まれていく。「フリーセックス」は、1960年代半ばに日本のジャーナリズムに登場したとされる和製英語である。「結婚にこだわらない自由な性交渉」を意味し、当初は「性教育が発達し、十代の性関係に寛容であるとされた北欧の国々の性的なあり方」(斎藤2004:206)を指す言葉だったが、男性メディアはこれをすぐに「乱交」「ゆがんだ性」などと表現し、男性の妄想をかき立てるトピックに仕立てていったという。「レスビアン」も「フリーセックス」の実践者に加えられ、その「乱れた性」が具体的に描写されることで肉体関係や異常性が強調されていった(赤枝2014:146-148)。

1960年代後半以降、女性同性愛の言説化は「レス(ズ)ビアン」(以下「レズビアン」で表記を統一)という概念を軸になされていくことになる。

(2) 一般雑誌の「レズビアン」表象

1960年代に「レズビアン」は主に「人」を指す言葉となった¹⁷⁾。それは、女性間の性的な「行為」や「関係」のみならず、その関係へ誘われる「人」という存在、さらには個人の内面にあるとされる「性欲」への関心呼び起こす。では「レズビアン」という概念を介して世間から注視されたのは、女のどのような性欲だったのか。筆者は、1960年代後半(1967年から69年)の一般雑誌の「レズビアン」表象を分析し、この問いに取り組んだことがある。以下でその内容を紹介したい(杉浦2005b, 2013)。

1960年代の「レズビアン」には、歌劇の男役やその女性ファン、男装のバーテンダーやバーに集まる女性、ときには「エス」など、今から考えると雑多な女性が放り込まれていた。しかし、「レズビアン」という概念が可視化したのは、男らしさを売りにする「玄人」ではなく女性的な「素人」、なかでも「芸能」や「社交」ではなく「性的な刺激」を楽しむ女性、さらには性行為で「男役」ではなく「女役」を担当するとされた若年女性の性欲だった。「レズビアン」の語が使われた記事の多くは男性向けの雑誌に掲載されており、赤裸々なセックス描写がポルノとして消費されたことは見やすい。

レズビアン女役は、何らかのきっかけで開花した性欲を抑えることなく、女とのセックスで男以上の性的快感を得る女として描かれている。これは、まさしく性的な主体性を発揮する女であるが、問題とされたのはこのような女の性欲であった。1960年代後半の「レズビアン」表象は、その性欲が「女へ向かう」からというよりは「男の能動性に支配されない」から脅威である、というプロットに貫かれている。

戦前の女性同性愛言説はヘテロセクシズムを基底とする、とすでに述べたが、このことは1960年代後半の「レズビアン」言説にもあてはまる。ヘテロセクシズムは「男の性欲は能動的でなければならない」という強迫観念を作りだす。男の性的主体化は女を性的客体

とすることに依存しているため、男の能動性に支配されない女の性欲が恐れられることになる（小田 1996: 80）。一般雑誌における「レズビアン」表象は、男の性的な主体化を攪乱する女への恐怖や不安が現れたものであった。

(3) 一般雑誌の分析における課題

筆者が観察した 1967 年、68 年、69 年は、それまでと比べて一般雑誌に掲載された「レズビアン」関連記事の点数が増えた時期であった¹⁸⁾。増加の一因に、奈良林祥（1967）、秋山正美（1968）、清岡純子（1968）、岡崎克彦（1969）などによる関連書籍の出版が相次いだことがある。著者らが取材を受けた記事や、著作が紹介される記事も少なくない。『エロチカ』創刊号（1969 年 7 月、三崎書房）の特集も「レズビアニズム」であり、1967 年から 69 年はさながらレズビアン・ブームの様相を呈した。

1960 年代の状況については、赤枝（2014）と杉浦（2005b, 2006, 2013; Sugiura 2006）がまとめているが、これらが対象とした資料は、それ以前の言説との対比においてさらに読み込まれる余地があると考えている。手元の資料を少し見返しただけでも、「レズビアン」概念のもとに描かれる女の性欲が年齢・階層・職業・外見・婚姻上の地位などによって異なっていることがわかる。1950 年代までの言説との連続性／切断の考察は、1960 年代の分析に足りない点である。

また、筆者は、レズビアン・ブームの時期の関連記事を男性の性的主体化への恐怖を表現するものとして分析したが、もちろん別の分析の仕方もありえる。たとえば、人間に関する科学的・専門的な知や家族・学校・法律などの制度が「レズビアン」言説の形成において重要な役割を果たすことはなかったのか、といった視点からの分析も意味があるだろう。

4 —— レズビアン解放運動の展開 — 1970年代から1990年代半ば

1960 年代後半以降、日本では、異性愛男性に侵害されるために捏造された「レズビアン」が氾濫した。それは、見方によっては「性的な主体性を獲得した女」を描いていたが、同時に「性に奔放な女」というステレオタイプを流通させるものだった。1960 年代後半に完成したレトリックやプロットは、1970 年代、1980 年代を通じ繰り返し使われ、一般社会に偏見をまき散らした（杉浦 2006）。

他方、1970 年代に入ると「女性同性愛者」「レズビアン」たちによる発信が確認できるようになり、一般に流布するステレオタイプへの介入が始まる。そうした発信や活動を取り上げた著作はいくつもある（広沢 1987; 久田 1987; 渡辺 1990; 葉月 1994; 敦賀 1995; 富岡 1996; Ishino and Wakabayashi 1996; 出雲ほか 1997; Summerhawk, McMahill and McDonald 1998; 『anise』 2001; 大江ほか 2003-2004; 堀江 2006; 飯野 2008; Sawabe 2008; 杉浦 2005a, 2008, 2009）。しかし、それらの著作は、運動の歴史記述にとどまるか、運動からの発信を差別へのインパクトと

いう点から評価するかのどちらかであり、レズビアンから発せられた数々の言葉を（レズビアンや女の）「性欲」という領域や経験を構築する言説として眺めることはない。つまり、女性同性愛に関するテキストから「性欲（セクシュアリティ）の歴史」を編むという課題において、1970年代以降は手薄である。

以下で、1970年代以降のレズビアン運動の展開をごく簡単にまとめておく。これらの動きのなかで残された膨大なテキストは、「性欲」の視点から丁寧に読み直される必要があるものである。

4-1 1970年代

1971年は、日本初とされるレズビアン・サークル「若草の会」が始まった年である。鈴木道子（1950-）が「仲間と出会いたい」という思いから設立し、約15年続いた。その間、少なくとも500人以上が入会したと見積もられている（広沢1987:113）。会の活動は、会誌の発行、毎月の茶話会、年に1回の小旅行などで、会員同士の交流に力が注がれていた（福永1982:98）。鈴木が会の宣伝のためならマスメディアの露出を厭わなかったこともあり、会の存在を知る者は全国に散らばっていたようである（福永1982:99）。

1970年代後半になると、若草の会のやり方に物足りなさを感じていた女性たち、「ウーマン・リブ」「女の運動」と接点のあった女性たちが相次いでミニコミ誌を発行する。『レズビアンの女たちから全ての女たちにおくる雑誌 すばらしい女たち』（1976年11月）、『ザ・ダイク』（1978年1月に第1号、6月に第2号）、『ひかりぐるま』（1978年4月に第1号、9月に第2号）である。これらには、レズビアン・フェミニズムの思想にふれることで問題意識を育てたり、自らの抱えている問題を解決したりした経験が寄せられている（杉浦2008）。

4-2 1980年代

1980年代前半には「レズビアンフェミニスト・センター」と「シスターフッドの会」の発行物を確認できる。この頃から「リブ出身レズ」「思想系レズ」と呼ばれた人々の主張——女の解放とレズビアンの解放とを結びつけて考える言説——が、まずは男性のルポライターによって、1984年以降はレズビアン自身によって一般雑誌で紹介されるようになった。1985年には『れ組通信』（1985-2013）が創刊された。『通信』の発行に関わった女性たちは、その後、レズビアンのためのスペース「れ組スタジオ・東京」（1987-2013）を開設したり、『女を愛する女たちの物語』（1987）を出版したりしている。

4-3 1990年代

1992年には掛札悠子書いた『「レズビアン」である、ということ』が話題になり、翌年からレズビアン自身が企画編集に加わった「レズビアン特集」が一般雑誌で立て続けに組まれた。自ら顔を出しカミングアウトをしながら「レズビアン」の等身大を伝えようと

する自己表象は、1980年代の「思想系」と一線を画すものだった。掛札は、ミニコミ誌『LABRYS』（1992-1995）を発行したり、レズビアンとバイセクシュアル女性のためのセンター「LOUD」（1995-）を開設したりし、レズビアンのネットワーク化にも積極的だった。

1990年代後半は「性同一性障害」という概念の普及により「レズビアン」から「男性化した女性（オナベ）」の離脱がはかられた時期である。Sugiura（2006）は、雑誌メディアにおけるセクシュアル・マイノリティの扱いが「同性愛」から「性同一性障害」へ重点を移したことで、それに伴って「レズビアン」の自己表象が減ったことを観察しているが、1990年代後半の状況について踏み込んだ分析はなされていない。

5—— 結語

本論では、1910年代から1990年代までの「女性同性愛」言説に関する既存研究を、「性欲」の視点から整理した。この間「女性同性愛」は、ジェンダー非対称に構築された「性欲」に適合するかたちで言説化されてきている。大正期以来いまでも影響力を行使するこの「性欲」観を攪乱する言説はないのか。こうした観点から、すでに観察対象となった資料——とりわけ1970年代以降のアイデンティティ・ポリティクスのテキスト——を再分析することが今後の大きな課題である。筆者は、それを「レズビアン的欲望が不可視である」という現実問題への対処を考えるために不可欠な作業だと考えている。

〈注〉

- 1) 本論文は、2014年に『日本批評』に掲載された拙稿「日本の『レズビアンの戦後史』を読み直すために——『性欲』という観点の欠落について」（朝鮮語）を書き終えたのちに入手した2つの修士論文に触発されて、これを大きく修正するかたちで作成されたものである。
- 2) フーコーの「性の歴史」シリーズは1986年から87年にかけて邦訳された。1986年に『知への意志（性の歴史1）』（渡辺守章訳）と『快楽の活用（性の歴史2）』（田村俣訳）が、1987年に『自己への配慮（性の歴史3）』（田村俣訳）がいずれも新潮社から出版された。
- 3) 大正期前後に「同性愛者」という主体が誕生した、という古川の議論には、石田仁（2006, 2014）から異なる見方が提示されている。石田は、エロ・グロ記事で構成された戦後の性風俗雑誌を分析し、次のように述べている。戦後から1960年代において、「同性愛」は「もっぱら『同性愛者』がするものとしてではなく、性的関係を結ぶ者たちの間でならば起こりうる、流動的で可変的な、行為もしくは関係性のあり方の1つとして」（2014: 174）とらえられていた。したがって、『『個人化された同性愛』——あるいは人格としての同性愛——が大正期前後に成立した後、現在にいたるまでその考え方が連綿と人々を規定しつづけてきたとは考えづらい」（2014: 174-5）。
- 4) 「男同士の親密性」「男を愛する男」に関する研究は、「同性愛」という概念を軸に言説の変容をたどるもの以外に、「男色」研究の蓄積がある。
- 5) 「不可視であること」の問題性・差別性について少しだけ補足しておく。レズビアン的な欲望や主体が不可視であることにより、あからさまな忌避や蔑視、嫌悪や敵意を向けられずに済んでいるだろう、という見方がある。確かに不可視の領域にある何かに対してわかりやすい排除はなされないが、少なくとも「レズビアン」カテゴリーがすでに定着している現代日本において、レズビアンに対す

る排除は確実に行われている。しかし、排除の痕跡が消されやすく、状況はなかなか変わらない。これに対し、「レズビアン」として自らの体験を発信する女性たちの活動が1970年代以降の日本で連綿と続けられてきた。可視化(カミングアウト)のリスクを引き受けたうえで不可視化に抗おうとするのは、その欲望や主体、困難や排除のありようを伝えることで、社会の側が必要な配慮についてまともな想像力を発揮することを期待するからである。可視化は、そうした市民社会への信頼にもとづいた差別打開の一手であると思う。

- 6) 「性欲」という言葉がsexualityの訳語として「性的な本能／欲望／衝動」などの意味で頻りに用いられるようになったのは、20世紀初頭のことでという。川村邦光は、1907年に出版された田山花袋『蒲団』、二葉亭四迷『平凡』、産婦人科医の緒方正清『婦人家庭衛生学』が「性欲」をキーワードとして用いていることから、世間に流布するようになったのはこの時期だと推定している(川村1996: 88)。
- 7) 「エス小説」の「エス」は「sister」の頭文字とされ、明治期から女学校に見られた疑似姉妹の関係を指す。女学校特有の現象とされ、戦前には広く使われたカテゴリーである。「エス小説」とは、少女雑誌に掲載された同性への熱中を描いた作品のことである(赤枝2011: 140)。
- 8) 「同性愛といえば女性とりわけ女学生のもの」(古川1995: 207)と認識されるような戦前日本の状況(＝「同性愛」概念の女性化)は、これらの言説の効果として現れたと考えられる。黄綿(2008)は、1910年代から30年代の「同性愛」関連記事を検索し、読売新聞では83件のうち65件が、東京朝日新聞では37件のうち26件が女性同性愛のものであり、男性同性愛や両方を扱った記事より圧倒的に多かったと記している(黄綿2008: 17)。
- 9) 三橋修は、「女中」や「下女」など家のなかで下働きをする女性たちが性的な存在としてまなざされてきたことを、森鷗外の『ウィタ・セクスアリス』の読解から示している(三橋1999: 8-30)。
- 10) 加藤千香子は、1900年前後から1920年代にかけて女子労働者(女工)が「社会のなかでどのような存在としてみられ、何ゆえ蔑視の対象にされたのか、そしてその見方はどのように変わったのか」(2004: 109)を、「性(セクシュアリティ)」の観点から記述し、社会政策や労務管理において、女工は「性的な問題を孕む存在」(加藤2004: 132)として問題視されていたことを明らかにしている。
- 11) たとえば、日本の通俗性欲学の参照元であったクラフト＝エビングも、労働者階級と「異常」な性欲との結びつきを強調していた。
- 12) 中・上層女性の記事は婦人欄に掲載されたのに対し、下層女性は犯罪欄などに三面記事として掲載された、という違いも見られるという。そうした紙面構成は、労働者階級を「危険な階級」として印象づける仕掛けのひとつだった(黄綿2008: 23)。
- 13) ここでは触れなかったが、黄綿(2008)では、台湾、朝鮮など外地女性の女性同性愛の記事が分析され、内地女性のケースと問題化の位相が異なることが観察されている。さらに、肉体的な接触が自明視された労働者階級の女性の記事であっても、男性同性愛の記事と比較すると、性欲の存在がぼかさされる傾向があることも観察されている。これらは、「性欲」の構築のありようが、性別や民族によって異なるという重要な論点とかわっている。
- 14) カストリ雑誌とは、1946年10月から49年6月までに発行された大衆一般を対象とした読み捨て本のことである。粗悪な紙を使っていることや、エロ(性風俗)・グロ(猟奇)の内容がその特徴とされる(松沢1995)。
- 15) なお、赤枝は1930年代に入ると、「男性化した女性であっても『先天性』とは呼べない」(赤枝2004: 148-149=2011: 132-133)という言説もあらわれたこと、「同性心中」事件に登場する男性的女性たちは、事件のあと「女に戻った」と紹介される傾向があること(赤枝2013: 181-182)などを指摘している。つまり、戦前から「女性の男性化」を後天的・可変的な現象ととらえる言説が存在していたのである。「真性」であるが「後天的」であり、それゆえ「矯正可能」という言説の出現時期

の特定は、今後の課題である。

- 16) 柰田は『人間探究』『あまとりあ』において「女性同性愛」を指示する用語をカウントしている。その結果、「女子同性愛」が11件、「サッフイスト」が8件、「S」が6件、「トリバード」が5件、「レスボス愛」が4件、「少女歌劇」が4件、「といちはいち」が3件、「男装の麗人」が3件、「レスビアン」が1件、「ご親友・姉妹」が1件であったと報告している（柰田2014:40）。1950年代は性風俗雑誌でも「レスビアン」という語はほとんど使われなかったことがうかがえる。「サッフイスト」「トリバード」の語は、性科学の著作や性風俗雑誌で戦前から1950年代にかけてある程度使われたが、一般社会に定着することはなかった。他方「レス（ズ）ビアン」は1960年代以降、急速に普及した。
- 17) 1950年代の「レスビアン」は「人」を指す概念としては流通していなかった、と赤枝は指摘している。たとえば、『キンゼイ報告』女性篇（邦訳）では、「レスビアン」を「女性間の性的な関係」と説明しているし、その他の文献でも「レスビアン・ラブ」「レスビアン・クラブ」など形容詞的に用いられていたという（赤枝2012）。「レスビアン」は当初、主に「関係」のあり方をめぐる概念であったが、1960年代に入ると「人」を指す言葉になっていった。「関係」から「人」へ、「レスビアン」の指示内容に変化が生じたのである。
- 18) 筆者は、大宅社一文庫雑誌記事索引を利用し、戦後から2000年までの「女性同性愛」や「レズビアン」に関する雑誌記事を収集、データとして保管している。筆者のデータでは、1963年、64年、65年、66年の記事は各1点しかないが、67年は8点、68年は7点、69年は4点と急に増えている。

《参考文献》

- 赤枝香奈子, 2004, 「女同士の親密な関係と二つの〈同性愛〉——明治末から大正期における女性のセクシュアリティの問題化」 仲正昌樹編『差異化する正義』御茶の水書房, 117-156.
- , 2005, 「女同士の親密な関係にみるロマンティック・ラブの実践——『女の友情』の歴史社会学に向けて」『社会学評論』56(1): 129-145.
- , 2011, 『近代日本における女同士の親密な関係』角川学芸出版.
- , 2012, 「戦後日本における『レズビアン』の可視化」クィア学会第5回大会パネル「レズビアンと生存——可視／不可視と生死の交差」2012.11.25 神戸市看護大学.
- , 2013, 「杉浦郁子氏の書評に答えて（『近代日本における女同士の親密な関係』）」『論叢クィア』6: 176-182.
- , 2014, 「戦後日本における『レズビアン』カテゴリーの定着」小山静子・赤枝香奈子・今田絵里香編『セクシュアリティの戦後史』京都大学学術出版会, 129-151.
- 秋山正美, 1968, 『レスビアンテクニック——女と女の性生活』第二書房.
- 江原由美子, 2001, 『ジェンダー秩序』勁草書房.
- 福永妙子, 1982, 『レズビアン——もうひとつの愛のかたち』大陸書房.
- 古川誠, 1993a, 「同性愛者の社会史」『わかりたいあなたのため社会学・入門——常識破壊ゲームとしての社会学・全20講座』宝島社, 218-222.
- , 1993b, 「恋愛と性欲の第3帝国——通俗的性欲学の時代」『現代思想』21(7): 110-127.
- , 1994, 「セクシュアリティの変容——近代日本の同性愛をめぐる3つのコード」『日米女性ジャーナル』17: 29-55.
- , 1995, 「同性『愛』考」『イマゴ』6(12): 201-207.
- 羽太鋭治・澤田順次郎, 1915, 『変態性欲論』春陽堂.
- 葉月いなほ, 1994, 「日本におけるレズビアンの歩み」『Human Sexuality』15: 73-76.
- 広沢有美, 1987, 「日本初のレズビアン・サークル『若草の会』その15年の歴史と現在」『女を愛する女たちの物語——日本で初めて！ 234人の証言で綴るレズビアン・レポート』（別冊宝島64）JICC出

- 版局, 111-119.
- 肥留間由紀子, 2003, 「近代日本における女性同性愛の『発見』」『解放社会学研究』17: 9-32.
- 久田恵, 1987, 「元気印のレズビアン『れ組のごまめ』登場!」『女を愛する女たちの物語——日本で初めて! 234人の証言で綴るレズビアン・レポート』(別冊宝島64) JICC 出版局, 120-129.
- 堀江有里, 2006, 『〈レズビアン・アイデンティティ〉の可能性——日本におけるレズビアン研究の構築に向けて』大阪大学大学院博士論文.
- 飯野由里子, 2008, 『レズビアンである〈わたしたち〉のストーリー』生活書院.
- 石田仁, 2006, 『戦後日本における「男が好きな男」の言説史——雑誌記事にみる表象とそれを支える解釈枠組みの変容』中央大学大学院文学研究科博士論文.
- , 2014, 「戦後日本における『ホモ人口』の成立と『ホモ』の脅威化」小山静子・赤枝香奈子・今田絵里香編『セクシュアリティの戦後史』京都大学学術出版会, 173-195.
- Ishino, Sachiko and Wakabayashi, Naeko, 1996, "Japan," Rosenbloom, Rachel (ed.) *Unspoken Rules: Sexual Orientation and Women's Human Rights*, London: Cassell, 95-101.
- 出雲まろう・原美奈子・つづらよしこ・落合くみ子, 1997, 「日本のレズビアン・ムーヴメント」『レズビアン/ゲイ・スタディーズ』(『現代思想』臨時増刊) 25(6): 58-83.
- 菅聡子, 2006, 「女性同士の絆——近代日本の女性同性愛」『国文』106: 24-39.
- 加藤千香子, 2004, 「近代日本の『女工』観——ジェンダー/セクシュアリティの視点から」歴史研究会編『性と権力の歴史(シリーズ歴史学の現在)』青木書店, 107-138.
- 川村邦光, 1996, 『セクシュアリティの近代』講談社.
- 黄綿史, 2008, 「言説としての『女性同性愛』の誕生——1910年代~30年代の下層階級における『同性愛』関連記事の分析」法政大学大学院国際文化研究科修士論文.
- 清岡純子, 1968, 『女と女——レズビアンの世界』浪速書房.
- 前田直哉, 2011, 『男の絆——明治の学生からボーイズ・ラブまで』筑摩書房.
- , 2014, 「1970年代における男性同性愛者と異性婚——『薔薇族』の読者投稿から」小山静子・赤枝香奈子・今田絵里香編『セクシュアリティの戦後史』京都大学学術出版会, 173-195.
- 松沢呉一, 1995, 「カストリ雑誌と『ガロ』の永井さん」『性メディアの50年——欲望の戦後史ここに御開帳!』(別冊宝島240) 宝島社, 23-31.
- McLelland, Mark, 2004, "From Sailor-Suits to Sadists: 'Lesbos Love' as Reflected in Japan's Postwar 'Perverse Press'", *U.S.-Japan women's Journal*, 27: 3-26.
- 三橋修, 1999, 『明治のセクシュアリティ——差別の心性史』日本エディタースクール出版部.
- 奈田光, 2014, 「性科学の言説と『女子同性愛者』の主体化——戦後から1950年代における日本の性風俗雑誌の言説分析」一橋大学大学院社会学研究科修士論文.
- , 2014, 「修士論文発表『性科学の言説と『女子同性愛者』の主体化——戦後から1950年代における日本の性風俗雑誌の言説分析』」RIA 研究成果発表会, 2014年2月22日, 国際基督教大学(報告レジュメ).
- 森山至貴, 2012, 『「ゲイコミュニティ」の社会学』勁草書房.
- 奈良林祥, 1967, 『レズビアン・ラブ』(シリーズ名 Q collections) コダマプレス.
- 小田亮, 1996, 『性(一語の辞典)』三省堂.
- 岡崎克彦, 1969, 『禁男の幻影——レズビアン・ラブ』勁文社.
- 大江千束・溝口彰子・池田久美子, 2003-2004, 「座談会 レズビアンコミュニティの現状(上)(下)——『生活者』として活動を継続する時代に」『オンラインマガジン セクシュアルサイエンス』2003年12月号, 2004年1月号.
- 斎藤光, 2004, 「フリーセックス」井上章一・関西性欲研究会『性の用語集』講談社現代新書, 206-212.

- Sawabe, Hitomi, 2008, "History of lesbian activism and publications in Japan," *Sparkling Rain: And Other Fiction from Japan of Women Who Love Women*, Summerhawk, Barbara and Hughes, Kimberly (ed.), 6-32.
- 澁谷知美, 2013, 『立身出世と下半身——男子学生の性的身体の管理の歴史』 洛北出版.
- 下川耿史, 1995, 「街頭のエロ写真売りはどこに消えた?」『性メディアの50年——欲望の戦後史ここに御開帳!』(別冊宝島240), 宝島社, 32-36.
- 新ヶ江章友, 2013, 『日本の「ゲイ」とエイズ——コミュニティ・国家・アイデンティティ』 青弓社.
- 杉浦郁子, 2005a, 「日本におけるレズビアン・スタディーズの課題」『2004年中央大学社会科学研究所シンポジウム記録集「日本におけるセクシュアル・マイノリティ・スタディーズ」——戦後日本〈トランスジェンダー〉社会史VIII』中央大学社会科学研究所「セクシュアリティの歴史と現在」研究チーム・戦後日本〈トランスジェンダー〉社会史研究会(編集・発行), 12-20.
- , 2005b, 「一般雑誌における『レズビアン』の表象——戦後から1971年まで」『現代風俗学研究』11: 1-12.
- , 2006, 「1970、80年代の一般雑誌における『レズビアン』表象——レズビアンフェミニスト言説の登場まで」矢島正見編著『戦後日本女装・同性愛研究』中央大学出版部, 491-518.
- , 2008, 「日本におけるレズビアン・フェミニズムの活動——1970年代後半の黎明期における」『ジェンダー研究』11: 143-170.
- 編, 2009, 『日本のレズビアン・コミュニティ——口述の運動史』(財団法人東海ジェンダー研究所2007年度個人研究助成成果報告書).
- , 2013, 男の猥談に現れる女の性欲——1960年代雑誌記事の『レズビアン』言説 中河伸俊・赤川学編『方法としての構築主義』勁草書房, 115-133.
- Sugiura, Ikuko, 2006, "Lesbian Discourses in Mainstream Magazines of Post-War Japan: Is Onabe Distinct from Rezubian?" *Journal of Lesbian Studies*, Vol.10, No.3/4, 127-144.
- Summerhawk, Barbara, McMahill, Cheiron and McDonald, Darren (eds.), 1998, *Queer Japan: Personal Stories of Japanese Lesbians, Gays, Bisexuals, and Transsexuals*, Norwich, VT: New Victoria.
- 竹村和子, 1997, 「資本主義とセクシュアリティ——[ヘテロ]セクシズムの解体へ向けて」『思想』879: 71-104.
- 富岡明美, 1996, 「訳者解説」リリアン・フェダマン／富岡明美・原美奈子訳『レスビアンの歴史』筑摩書房, 384-393.
- 敦賀美奈子, 1995, 「『れ組スタジオ・東京』での8年間」『imago』6(12): 46-51.
- 渡辺みえこ, 1990, 「日本における女性同性愛の流れ——あとがきにかえて」渡辺みえこ他訳『ウーマンラヴィング』現代書館, 184-189.
- 「1971-2001 年表とインタビューで振り返るコミュニティの歴史」『anise』2001年夏号, 28-78.
- [すぎうら いくこ・和光大学現代人間学部現代社会学科准教授]